

ポローニア

paulownia



絵:高橋茉莉乃(附属大塚特別支援学校)

目次

教育局次長挨拶	
ポローニア巻頭言 ◆甲斐雄一郎	2
特別支援教育研究センター	
免許法認定公開講座 ◆四日市 章	2
附属学校教育局	
教員免許状更新講習 ◆松本末男	2
創立10周年記念行事を開催 ◆雷坂浩之	3
富浦合宿 ◆眞榮里耕太	4
富浦生活—附属中学校の海浜生活の紹介 ◆金子丈夫	4
「伝統の一戦」である 対学習院総合定期戦(院戦) ◆中塚義実・熊田 亘	5
東京都障害者スポーツ大会に参加しました ◆佐々木高一	5
つくさか地域食育支援プロジェクト ◆黒岩健一	6
大船渡市の仮設住宅棟でのマッサージ ◆宮本俊和	6
JICA長期研修員と文部科学省教員研修留学生が 附属聴覚特別支援学校を訪問 ◆伊藤僚幸	7
附属視覚特別支援学校の生徒が インド共和国を訪問 ◆岸本有紀	7
春期研修会・研究発表会のお知らせ	8





YUICHIRO
KAI

「白砂糖は黒砂糖から出来るよ」 ……大学院共通科目「教師論」をめぐって

附属学校教育局 次長 甲斐雄一郎

筑波大学では2007年度より各附属学校を代表する先生方のうち四名をお招きし、大学院各研究科を横断する集中科目として「教師論」を開講しています。それは講師の先生方によるライフストーリーと重ね合わせた教師経験に関する語りによって、受講生が教師の条件、また魅力ある教師像について議論するというものです。

この授業に関わるようになったおりに感じた素朴な疑問は、教科や学校種において異なる立場の方々の話を、経験はもとより、専攻も進路も多様な受講生がうまく理解し、自らの糧として再構成できるのかということです。けれどもそれは杞憂に過ぎませんでした。先生方の話は個別の事例に基づくもので、しかもそれぞれまことにユニークなものであったにもかかわらず、重要なポイントのいくつかにおいては驚くほどの重なりを認めることができたからです。

日露戦争時、日本海海戦の作戦参謀だった秋山真之は、彼が計画して実現した戦艦の布置について後年「どことなく水軍のにおいがするようだね」という指摘を受けた際、「白砂糖は黒砂糖から出来るよ」と応じたということです。それは古今東西の軍学書から中世の海賊の記録にいたるまでの濫読を通して純粹原理を導きだしたとされる秋山ならではのコメントですが、同様に「教師論」の先生方の語りは滋味ある「黒砂糖」として、受講生各自がそれぞれに純粹原理としての「白砂糖」を抽出するきわめて貴重な契機となってきたのでした。

特別支援教育研究センター 免許法認定公開講座

特別支援教育研究センター長 四日市 章

特別支援教育研究センターが企画し、附属学校教育局と協力して開催している免許法認定公開講座では、全ての障害種に関わる特別支援学校教員免許状（一種・二種）の取得を可能としており、毎年、全国から500名近い参加者を得て実施している。この公開講座の特徴は、筑波大学附属特別支援学校5校と本センター・人間系障害科学域の協同により、教育・指導に関する理論的な内容だけでなく、附属学校教員による、高度な実践的基盤に基づく、各障害児の指導に関する具体的な指導内容を提供できることにある。このような、理論と実践を融合した講義内容の提供は、筑波大学ならではのものと自負している。講座受講後の参加者のアンケートからも、参考になった、とてもよかったという感想や意見が多く聞かれている。今後も、全国の特別支援教育の資質向上のために、本センターが一丸となって進めていきたいと考えている。

附属学校教育局 教員免許状更新講習

附属学校教育局 教授 松本末男

筑波大学の教員免許状講習は、筑波大学と東京地区の文京キャンパスと附属学校を会場にして、今年度も教員免許状更新講習が行われている。今年度は、必須講習が5講習、選択B（現代教育の課題と展望）が43講習、選択C（教養の新たな世界を体験する）が62講習、選択D（附属学校実践演習）が20講習、合計130講習の開講科目が行われている。おかげさまで受講者からは教育の筑波にふさわしい講習内容であると高い評価を得ている。今年度は、全体で、5799人が受講している。そのうち、東京地区の受講者は3000人を超えており、全受講者数の半数を担当している。受講後のアンケートからは、これからの教育実践に生かされる内容であるとか、こういった講習が欲しかった等の意見が寄せられている。その反面教室の狭さや室温などの環境面での課題も挙げられている。

今後も附属学校の教員と協力しながらより質の高い講習をめざしていきたい。

創立10周年 記念行事を開催

附属久里浜特別支援学校 副校長 雷坂浩之

去る7月27日(土)に、本校では創立10周年記念行事を開催しました。本校は平成16年4月1日、知的障害を伴う自閉症の幼児児童に対して、幼稚園及び小学校に準ずる教育を行い、併せて特別支援学校の教育課程の改善に関する研究や自立活動の指導法等に関する研究、現職教員の研修事業等を行うことを目的として設立されました。今年度は、国立久里浜養護学校から筑波大学の附属学校となって10年という節目に当たるため、記念行事を開催し、本校の子どもたちのほか、保護者や地域の方々、卒業生、元職員ら約200名の方々が集まり、スライドをもとに学校の歴史を振り返りながらこれまでの発展を共に祝福しました。



当日は、「記念式典」「きらきらコンサート」「祝賀会」という構成で進められました。「きらきらコンサート」は、昨年に引き続き、ジャズピアニストである谷川賢作氏を迎え、ピアノ演奏に谷川氏自身のユーモアあふれるトークを交え、幼児・児童たちが合唱したり、打楽器などで演奏に参加するなど、列席者全員がコンサートを満喫しました。また、このコンサートには、附属視覚特別支援学校の幼稚部の子どもたちやその保護者の方々も多数ご参加いただきました。「祝賀会」では、OB職員の出席者から、本校の教育活動のさらなる充実に向けての叱咤激励や期待の声が寄せられました。

また、この日は、10周年を記念して新設した図書室「おひさま文庫」を初めてお披露目しました。見学した幼児・児童は、真新しい書籍のにおいを楽しみつつ、目を輝かせながら、様々な絵本を手にとって楽しむ様子が見られました。

本校が筑波大学附属の特別支援学校として無事に10周年を迎え、ご列席の皆様方とその喜びを分かち合えたことを、教職員一同心より感謝申し上げます。



富浦合宿

附属小学校 教諭 眞榮里 耕太

「あいよー(愛洋)」
子どもたちの声が今年も
富浦の海に響きました。

本校6年生は、毎年7
月27日から30日まで附
属中学校の富浦寮を
お借りして富浦合宿を

行っています。この合宿は、3日目に行う遠泳を全員が完泳することを目標にして取り組んでいます。遠泳は40分程度行います。条件がよければ湾から出て泳ぎます。附属中学校のOB組織である「桐游倶楽部」の指導のもと、海での泳ぎ方を身につけていきます。

本校では、1年生の時から体育授業で水泳の時間を確保し、夏休みに1週間の水泳学校によって一人ひとりの泳力を高める体制をとっています。6年生になるとプールで10分から15分程度、足を着かずに泳ぎ続けることができるようになります。ここまでくるといよいよ富浦合宿に臨みます。

初日は、午後からいよいよ海に出て練習です。初日の練習では、海で泳ぐことへの不安が表情から見てとれました。実際に泳いでもみても海水の冷たさ、足がつかないことへの不安、潮の流れなどが原因で本来の泳ぎができない子もいました。

2日目は、8つのグループに分かれて練習です。徐々に足が着かない深さに挑戦しました。海での泳ぎ方が身につけてきたため、子どもたちの表情にも余裕が生まれ、海を楽しめるようになりました。

いよいよ3日目の遠泳を迎えました。残念ながら、当日は早朝から雨が降り、海のコンディションが心配されました。しかし、海は穏やかで遠泳することに問題なく、予定通り2組に分かれ遠泳を行いました。

今年も遠泳に参加した全員が完泳することができました。泳ぎ終わって浜に戻ってきた子どもたちの顔は実に晴れ晴れしたものでした。

「1人では決して泳ぎ切ることができないが、仲間がいたから完泳できた」と感想が数多くありました。そこからもわかるように仲間の大切さを学び、一回り成長した姿がそこにありました。

今年も多くの方々の協力のもと富浦合宿を終えることができました。この合宿がこれからもまた子どもたちの成長の場であってほしいと願っています。

富浦生活

—附属中学校の海浜生活の紹介

附属中学校 副校長 金子 丈夫

富浦での海浜生活は、1904(明治37)年の夏から開始されました。100年以上続く行事です。1955年からは中学だけの6泊7日の2期を設けることになりました。1961年ころから、中学校が桐陰会水泳部(桐游倶楽部)に水泳指導を委嘱するという形を明確にし、海浜生活の充実に努めました。現在行われている富浦生活の基本がこのころできあがりました。1957~62年にかけて寄宿舎(富浦寮)の全面新築され現在のものができあがりました。行事の見直しが行われ、1973年から5泊6日、1993年から4泊5日の現在の形になりました。2003年にトイレが、2004年に風呂場が新築されました。そして、2004年に富浦水泳場開設百周年記念式典が挙行されました。

現在行われている富浦生活は、5クラスをそれぞれ半数ずつに分け、前期・後期の2期で実施されています。富浦生活のねらいは次の2点です。①海浜での集団生活を通して、規律正しい生活態度を身につける。②安全・健康に注意し、水泳の技能、体力の向上を図る。寮生活は、起床から就寝まで、生徒役員を中心として自治的に運営されています。そして、室長は室員の掌握に努め、富浦生活は水泳訓練が大きな目標であるため、事後防止の見地から人員点呼は特に厳正に行っています。

第1日目:バスで移動。昼ころ到着。入寮後水泳訓練。避難経路確認。入浴後自由時間・自由研究 夕食後夜の時間、富浦委員会。室長合同会議・保健委員会。室会合後就寝。

第2・3日目:朝礼・朝食、水泳訓練、避難訓練、入浴、昼食、昼寝。午後の水泳訓練、入浴、自由時間・自由研究。夕食、水泳講話、歌の練習・レク準備。以下1日目と同じ。

第4日目:朝礼・朝食、「遠泳」、入浴、昼食、昼寝、水泳準備後集合写真。水府流太田派の泳法級判定試験を含む水泳訓練。入浴、自由時間・自由研究。夕食、室会合後レクレーション。

第5日目:朝礼・朝食、大掃除、寝具類の整理整頓、後かたづけ・身辺整理。室会合、全体での振り返り『富浦生活を終えて』の感想文作成。退寮式、昼食、帰校。

6月から約10時間を使って事前準備をする「富浦生活を経験して附属中生になる」といわれている行事です。

脚立からの飛び込み



寮での食事



泳ぐ浜の全景

『伝統の一戦』である対学習院総合定期戦(院戦)

附属高等学校 教諭 中塚義実・熊田 亘

附属高校には独自の対抗戦を行っている運動部が多い。開成レース(開成高校とのボート部の定期戦)、湘南戦(湘南高校とのサッカー部の定期戦)など、いわゆる『伝統の一戦』である。

そのなかでも、学習院高等科・女子高等科との総合定期戦は『院戦』と呼ばれ(学習院側は『附属戦』と呼ぶ)、長い歴史がある。『筑波大学附属中学校・高等学校 創立百年史』を繙けば、第二次世界大戦前、旧高等師範学校附属中学校(旧制)の時代、1901(明治34)年には野球部が、1903(明治36)年には柔道部が、それぞれ学習院との対抗戦を開始しており、それが、しだいに参加種目(運動部)を増やし総合定期戦となり、戦争の時代の中断をはさんで、現在まで続いているのである。

その院戦が、本年度も6月1日(土)に学習院高等科を会場にして行われた。第63回となる。

好天に恵まれ、19の正式種目と一般種目(一般生徒の参加によるフットサル、ドッジボール、大縄跳び)のすべてを行うことができた。

院戦は、運動部の日頃の取り組みを披露する場であり、多くの部では3年生最後の晴れ舞台となっている。また、附属高校の運動部員は、入学後1年次の院戦まではいわば『見習い期間』で、院戦を経て部の、そして附属高校の一員としてのアイデンティティを獲得する感がある。

院戦当日は、応援団やチアリーダーによる応援だけでなく、在校生、教員、保護者、卒業生などから湧き上がる大声援で、各会場とも大賑わいであった。卒業生が再会を喜ぶ姿もいたるところで見られた。

残念ながら、今年度の栄冠は学習院が勝ち取った。しかし、どの種目もその差は紙一重。各運動部は次なる目標へ向かって練習に励んでいる。

チア

剣道部



東京都障害者スポーツ大会に参加しました

附属桐が丘特別支援学校 教諭 佐々木 高一

平成25年5月25日(土)、附属桐が丘特別支援

学校の中高等部は、味の素スタジアムで行われた第14回東京都障害者スポーツ大会陸上競技の部に参加しました。この大会は、桐が丘の中高等部が毎年学校行事として参加している大会であり、生徒たちが楽しみにしている行事の一つです。

また本大会は全国障害者スポーツ大会への派遣選手選考会も兼ねているため、優秀な成績を修めると全国大会へ出場できるチャンスがあります。特に、今年は全国大会(スポーツ祭東京2013)が地元東京で開催されるということもあり、生徒たちのやる気は例年以上に高まっていました。

競技の種目には50m走、100m走、ソフトボール投等のほか、肢体不自由の障害があっても参加しやすいよう工夫されたスラローム走やピンバック投というものがあります。生徒それぞれの実態に応じて、出場する種目を決めていきます。大会では一人2種目に参加します。

大会に向けての練習は、体育の授業を中心にしますが、それ以外でも、自主的に朝練習や放課後練習に熱心に取り組む生徒もいます。生徒たちは、昨年の大会で出した自分の

記録を参考に、その記録を上回るためのフォーム修正に努めました。また、出場する競技時間を考慮していつ昼食を食べるか、いつウォーミングアップをするか等のスケジュールを考えたり、車いすの空気圧チェックをしたりする準備にもそれぞれで取り組みました。

大会当日は天候にも恵まれ、中高等部生徒50名が元気に参加しました。競技前は緊張やプレッシャーを感じている様子が見られましたが、競技では自分の力を精一杯出していました。結果は、金メダル25(大会新3)、銀メダル17、銅メダル20、合計62のメダルを獲得することができました。そして、中学部生徒1名が全国大会の選手に選ばれました(この生徒は、平成25年10月12~14日に行われた全国大会で50m走3位入賞しました)。

メダルを取れなかったけれども自己ベストの記録更新を果たした者、思うような記録が出せず悔しがる者など、結果は様々でしたが、生徒たち全員の頑張る姿に感動した1日となりました。

来年の大会でも、生徒たちが見せる真剣な眼差しやたくさんの笑顔に出会えることを今から楽しみにしています。



つくさか地域食育支援プロジェクト

附属坂戸高等学校 実習助手 黒岩健一



本校生徒によるダイコンの植まき指導

附属坂戸高等学校「つくさか地域食育支援プロジェクト」は、坂戸市内の小中学校における食育活動や、農業体験学習を支援する社会貢献活動です。本校農場をフィールドとした体験学習や、各小中学校での学校菜園づくり指導、また、小中学校の先生方を対象とした農業研修会などを開催しています。さらに、本校の授業で生産した野菜や卵を、小中学校の給食用に提供しています。

食や農業への社会的関心が高まるなか、坂戸市内の多くの小中学校でも、食育活動や農業体験学習に取り組んでいます。しかし、専門的な指導が困難なために十分な成果が得られ

ないとの声が聞かれていました。このような背景から、広い農場を有する本校へ、近隣小中学校からの農業体験学習の支援依頼が寄せられるようになりました。これらの依頼に対し、断続的に支援を行い、その成果が実感されると、より継続的な取り組みを求める声が多く寄せられるようになってきました。このような声に応えるべく、2010年に「つくさか地域食育支援プロジェクト」を立ち上げました。2011年からは「筑波大学社会貢献プロジェクト」の採択を受けて、より充実した支援を、より多くの小中

学校に向けて行うことが可能になりました。

現在取り組んでいる主な継続的支援は、小学校菜園におけるダイコン栽培交流学習（2年生）、小学校菜園における夏野菜・秋冬野菜栽培学習の支援（5年生）、中学校菜園における栽培計画と管理の指導助言（中学校教員対象）、本校農場における小学生の栽培飼育動植物探索学習（1年生・2年生・5年生）、本校農場での野菜栽培交流学習（中学校特別支援学級）、本校農場での小学校教員の夏期農業体験研修会などがあります。その他に、小中学校への出前授業や、市役所主催の「夏休み食育体験教室（手打ちパスタづくり）」なども行っています。

また、給食食材の提供もこのプロジェクトの大切な取り組みの一つです。地元の新鮮な食材を使った美味しい給食を食べてもらえるように、支援先の栄養教諭の先生方と相談しながら、栽培品目や収穫時期を工夫しています。現在は、地域性のある食材の提供にも取り組みはじめています。

「つくさか地域食育支援プロジェクト」は本校教員による純粋な社会貢献活動だけにとどまりません。本校の授業としても、様々なかたちで積極的に取り組まれています。「つくさか地域食育支援プロジェクト」は、総合学科高校にふさわしい貴重な学習機会を提供して、本校の教育成果の充実にも大きく貢献しています。

特別支援学級との交流学習（秋冬野菜栽培）



本校生徒による農場探索学習の指導

大船渡市の仮設住宅棟でのマッサージ

筑波大学理療科教員養成施設長 宮本俊和



理療科教員養成施設は、盲学校で鍼・灸・マッサージを教える教員を養成する教育機関で、今年創立110年の年を迎えました。本施設は、文部科学省の復興教育支援事業の採択を受け、事業の一つとして仮設住宅居住者の健康維持や疾病

予防を目的としたマッサージによる支援を行ってきました。事業は終了しましたが、現在も活動を続けています。

東日本大震災で被災し仮設住宅に居住している方は、高齢者が多く、狭い居住空間にいるために膝や腰の痛みや肩こりが生じます。また、仮設住宅の居住期間が長くなると運動不足のため生活不活発病が起こり、筋力の低下や関節の変形が進行して日常生活活動に影響を及ぼします。

本施設では、岩手県の大船渡市を中心に仮設住宅居住者のマッサージと健康指導を行ってきました。今回は、8月4日から5日に行ってきた活動について報告します。スタッフは、鍼、灸、マッサージ師の国家資格を持つ4名と現地のスタッフ（大船渡に住む筑波大学OB）で行いました。大船渡までは、現在、大船渡線が開通していないため、一ノ関駅からレンタカーなどを借りて行くことになります。

今回マッサージを受けた人は、8月4日は、大船渡中学校仮設住宅17名、本増寺5名、5日は盛小学校仮設住宅9名、小中井地区仮設住宅8名でした。女性が約8割を占め、60代、70代の方が大半ですが、中には中学生もいます。

大半の方は、腰痛、膝痛、肩こりを訴え、もともと病気を持っていたが、震災後悪化したと答える人が多くいます。私たちのマッサージによる支援は、今回で3回目ですが、楽しみにしている常連さんが多くいます。昼食抜きでマッサージをしていますと、集会場のある調理場で鍋焼き（ホットケーキみたいなもの）やおにぎりを作ってくれます。和気あいあいとマッサージの順番待ちをしている方と話しながら、楽しい時間を過ごします。しかし、大船渡の中心部は津波の被害を受けたため、電車の復旧の見通しは立っていません。仮設の復興屋台村などの飲食店がありますが、国道沿いを除けばまだまだ空き地が大半を占めています。

私たちは、私たちが行うマッサージと共に、仮設住宅居住者の方がご自身でできるセルフマッサージや運動法を指導しています。これらの効果が、痛みの軽減や筋力低下を防ぐことができるかを体力測定や日常生活の活動量を指標に検証する研究も行っています。



JICA長期研修員と 文部科学省教員研修留学生が 附属聴覚特別支援学校を訪問

附属聴覚特別支援学校 副校長 伊藤僚幸



平成25年7月2日、JICAの長期研修員（アフガニスタン）の方3名と文部科学省教員研修留学生（チリ）の方1名が、附属聴覚特別支援学校を訪問されました。一行は、乳幼児教育相談から

小学部、中学部、高等部普通科、高等部専攻科の授業参観と、寄宿舎を見学されました。幼稚部では、目を輝かせながら幼児が綿菓子について話し合っている授業を参観、小学部音楽の授業では、5年生の子ども達とふれあう機会がありました。中学部では、ICTを利用した家庭科の授業に興味深く見学されていました。「授業の組み立てにうまくICTを使っていますね。将来、私たちの国でもこのような授業ができるようになりたい。」と感想をおっしゃっていました。その他、高等部普通科の習熟度グループに分けて行う授業や進学実績、専攻科の職業教育の説明には熱心にメモをとっていました。

施設・設備面では、聴力検査室、発音指導室、寄宿舎を参観されました。各教室に敷設してある補聴システムなど、とても充実した教育環境という印象を持たれたようです。寄宿舎の和室では、日本文化も体験いただきました。寄宿舎の西側に美しく見える東京スカイツリーは、持参したカメラに何枚もおさめていました。

学校を後にするとき、研修員と留学生の方々は、次のような感想をおっしゃっていました。「子供達が生き生きしており、明るく活動的なのが印象に残りました。廊下ですれ違うときなど、きちんと挨拶をしてくれる。こちらの気持ちも晴れやかになりました。先生方の指導技術はとて高く、見習うべきところがたくさんありました。帰国後は、ここで知り得たことを、自国の特別支援教育関係者に広く伝えたいと考えています。」



附属視覚特別 支援学校の生徒が インド共和国を訪問

附属視覚特別支援学校 教諭 岸本有紀



7月29日から8月7日の10日間、附属視覚特別支援学校専攻科鍼灸手技療法科の生徒2名が同科の教諭と共にインド共和国を訪問した。グローバルな視点で日本の鍼灸あん摩マッサージの貢献を考えたい、インド共和国の視覚障害者と交流し、現状を知りたいなど、それぞれ訪問を希望する生徒6名の中から2名を選抜し、代表としての訪問であった。

当校においては、JICAの委託を受け、「インド共和国における視覚障害者の職業教育支援」事業を展開しているところであるが、今回の訪問は、インド共和国での手技療法教育普及のための啓蒙活動に参加し、現地学生と交流しながら手技療法や日本文化を紹介すること、その中で、国際感覚を養い、アジア諸国の中で日本の視覚障害教育が果たすべき役割についての考察を深めるという目的をもっての訪問であった。

インド共和国では、インド国内の指導者養成課程の学生等を対象にしたプレゼンテーションや全身あん摩の実技交流を行った。プレゼンテーションは、学校内の視覚障害者に配慮した設備、補助機器、授業風景、治療風景および日本の視覚障害者の中で活発に行われているゴールボールとブラインドサッカーについて等、映像や実技を交えて英語で行った。その後、地域住民を患者として招き、教員の指導のもとで実際に日本の治療法で治療のデモンストレーションも行った。

この10日間は、英語での会話・プレゼン、衛生面、食事面など、慣れない環境の中でのスケジュールだったが、生徒にとって多くの学びの機会となった。インドの学生の一生懸命に学ぶ姿に感動し、触発され、今、学んでいるあん摩実技の大切さ、授業内容や施設設備が恵まれていることの喜びも実感できたようだ。そして、2名の生徒からは、今後も国際交流・協力・貢献の機会があるならば、ぜひ参加したいという感想が出された。



平成25年度 筑波大学附属学校教育局研修会

平成25年度筑波大学附属学校教育局主催の研修会を、次の要領で開催いたします。大阪大学教授 小野田正利氏（『親はモンスターじゃない！—イチャモンはつながるチャンスだ』学事出版、2008年、等書書多数）による講演、本学附属聴覚特別支援学校中学部生徒による映画上映が予定されております。

日時：平成26年2月22日(土) 10:00～13:30予定

場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区大塚3-29-1)

平成25年度 筑波大学附属学校研究発表会

附属学校教育局では、平成25年度研究発表会を次の要領で開催いたします。本学の附属学校及び附属学校教育局における日頃の研究成果を発表し、皆様方にご理解をいただくとともに、今後の教育研究活動の一助としていただければと考えております。

日時：平成26年2月22日(土) 13:40～18:00予定

場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎(東京都文京区大塚3-29-1)

詳細については、今後、附属学校教育局ホームページ
<http://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp>にアップします。
ご確認ください。

平成25年度 筑波大学附属学校教育局主催「公開教員研修会」

平成25年度筑波大学附属学校教育局主催の「公開教員研修会」を、次の要領で開催いたします。お忙しい頃とは存じますが、お誘いのうえ、ご来場いただきますようお願い申し上げます。

1. 日時：平成26年2月22日(土) 10:00～13:30 (開場・受付9:30～)

2. 場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎 1階134講義室
(東京都文京区大塚3-29-1)

3. プログラム

開会の辞	筑波大学附属学校教育局 熊谷恵子	10:00～
教育長挨拶	筑波大学附属学校教育局 教育長 石隈利紀	
講演	「モンスターペアレント論を超えて ～保護者と向き合う気持ちと教職員の共同性」	10:10～12:10
	講演後質疑応答	

————— 昼 休 憩 —————

発表	附属聴覚特別支援学校の高等部生徒 による映画上映	13:00～13:30
----	-----------------------------	-------------

閉会の辞	筑波大学附属学校教育局 熊谷恵子	13:30
------	------------------	-------

4. 参加費

無 料

5. 申込締切

平成26年1月31日(金)

6. 対象

筑波大学教職員及び学外教育関係者等

参加希望の場合は参加申込書によりFAXしてください。

(申し込み、お問い合わせ先)

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1

筑波大学東京キャンパス事務部学校支援課教育企画担当

TEL:03-3942-6809 FAX:03-3942-6911

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol. 28

発行日……平成25(2013)年10月31日

発行者……附属学校教育局教育長 石隈利紀

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙：Ulimax [日本製紙]

